

『『湿原』の取材と 野田弘志さんとの出会い』

小説家・精神科医 加賀 乙彦氏



かが・おとひこ
1929年4月生まれ。
東京大学医学部卒業。
東京都在住。
著書：『宣告』、『湿原』、
『永遠の都』他

平成21年1月17日に、だて歴史の杜カルチャーセンターで行われた加賀乙彦氏の講演を載録します。講演は、加賀先生の代表作であり、北海道を舞台とした『湿原』について、その挿絵を担当した写実画家の野田弘志先生にまつわるエピソードとともに語られました。なお、講演会はNPO法人伊達メセナ協会と伊達市教育委員会の共催で実施しました。

私は伊達にはよく遊びに来ます。それは、親友の野田弘志さんがここで製作に励んでおられるし、私の友達の宮尾登美子さんが「平家物語」を書くために伊達で執筆活動していたという縁がありました。伊達市は文化的な雰囲気があって、文学づいていて感じの町だなあと感じております。

今日はずっと昔に野田さんと一緒に「湿原」という小説を朝日新聞に連載したときのことを、つまりどんな風に取材をして、どのようなことが起きたかということをお話したいと思います。「湿原」というのは新潮文庫から出版されましたが、今は岩波の現代文庫になっています。まあ、非常に生真面目な小説なんですけど、読んでみるとユーモラスな人物が次々にでてくるという作品です。

舞台は道東の湿原地帯、厚岸から霧多布岬、根室、あの辺を舞台にした小説であります。かつて犯罪者であっていろいろな悪いことをした男と、大学生の少女が恋愛をするというちょっと変わった趣向の小説です。朝日新聞に連載されたのが、1983年5月7日から1985年2月5日までの628回です。枚数にすると1884枚という、ちょっと長い小説です。

きっかけは1982年頃に、私が厚岸の漁業組合の若い人たちに講演をしたことです。その時、講演が終わったあと、文学好きの若い漁師さんたちが大勢集まって宴会を開いてくれて、いろいろな話をしました。例えば、海に漁に行くと時化のときは全然魚が獲れない。そういう時は、みんなでトランプをやったり、あるいは酒を飲んで横になったりもするのだけれど、わりと一生懸命に小説を読む人もいます。そういう若い漁師さんと話をしているうちに、すごく厚岸という土地が好きになりましたね。素朴ですけど一生懸命に働いて、貧乏だけれども、

本を読んで、きちんとした質問をする。その時から彼らを中心とする人達の生活に興味を持つようになりました。

そのうち、地元の人たちとの付き合いが深くなってきて、何か書けそうな気になってきました。小説はどうやって書かかっていうと、私の場合は、自分の心の中にある普通の人にはなかなか言えないような秘密みたいなものがある、それをフィクションの形で外へ出していきたい、という気持ちがあります。そして、フィクションにするために、私は実際の人物をモデルにすることが多いのです。

まあ、これはいろいろな人がいて、モデルなんか全然いらぬという小説家もいるのですが、私はモデルがないと書けない。「雪森厚夫」という主人公は、昔、刑務所に入っていたことがあり、クスリをやったり窃盗をやったりしましたが、殺人のような大きな犯罪はやらないのです。このモデルとなった人が、ある日、私の高松での講演後に訪ねてきました。そして、「実は、私は昔、刑務所にいたことがある。そして中国に軍隊にとられて、中国兵をうんと殺したことがある。それから虐殺をしたこともある」と、そういう話をいきなり始めました。さらに、「先生、私のことを少し書いていただければ、私も死ぬときに思い出が残る」というのです。そこで私は考えて、「よろしい、あなたの話を全部聞きましょう」と、テープレコーダーを傍らにおいて、彼の話を3日間、朝から晩まで聞きました。聞き終わると、私の心の中で、一人の素朴な日本人が罪を犯して、しかも兵隊にとられて中国兵を虐殺するという、そういう物語が書けそうになってきた。さらに、その頃の学園紛争で東大の安田講堂が落城するなどの事件がありましたが、騒然とした世の中の様子が全部一緒になって、ひとつの物語が私の中で生まれてきました。

この「雪森」と、それから、「和香子」という大学生が恋愛をする話をひとつ作り上げて、「雪森厚夫」は高松の人ではなくて厚岸の人にして、と設定を変えているうちに、物語がだんだん立ち上がってきました。私の小説の生まれ方はそういうものです。実在の人物に会って話をし、この人物とこの人物を繋ぎ合わせてと考えるうちに、その背景として道東の湿原地帯を中心にしてものを書いてみたいと思うようになりました。

湿原というのは皆さんご存知のように底は泥炭ですね。その中にヤチ池と言う、所々に水を持った小さな池がありますが、これが底なしの池で、そこに入ったら二度と出られなくなるという危ない場所が方々にある。自然の力とはすごいもので、湿原は湿原として生き続けている。そういう自然の力と、それと戦う人間という、対立した構造がないと小説は面白くないのですが、そういうものが私の中で出来てまいりました。

さて、小説は1983年5月から書き始めました。その内、編集者がやってきまして、「誰か画家に挿絵を描いてもらわなければいけない。どの画家がいいか教えてください」という。ところが私は絵描きさんを全く知らないで、3人か4人くらいの画集をその人が持ってきて、「この内のどなたかどうでしょう」と聞く。その中で一番私が感心したのが、野田弘志さんの絵だったのです。

どこに感心したかという、対象をきちんとリアルに描く。中でも一番感心したのは「鳥の巣」の絵でした。実際の鳥の巣はですね、見るとクシャクシャとして、あまり魅力のないものなのです。ところが、野田さんが描いた鳥の巣は、いかにも鳥が一生懸命小枝を運んで作ったもので、その鳥の心というか、そういうものがきちんと描かれていました。ああ、こちらの方が実際の鳥の巣よりもっと鳥の巣らしい、これが芸術なのだ、ということ私はずぐ理解しました。そこで野田弘志さんをお願いしたいと思いました。

そこで、野田さんにお会いしました。「野田さん、北海道を舞台にする小説を書くので、描いてくださいますか？」そしたらなかなか答えてくれない。考え込んでいる。この人は非常にシャイな人なのかなって思ったら、そうじゃなくて「北海道に行ったことがない。だから書きようがない」と言うのです。ああそれは大変だということで、編集者と相談しまして、とにかく野田さんを北海道に連れて行く。つまり取材を始めようじゃないかということになって、釧路の湿原を探索することを始めました。

例えば、鴨の調査に行きました。10月1日が鴨猟の解禁日で、その日の夜明け前に湿原に入りますと日が昇ったとたん、あっちでもこっちでも鉄砲でどンドン鴨を撃つんですね。時々当たって落ちてくると、それを犬が拾ってご主人のところに持ってくる。私はびっくり仰天いたしました、こういう世界もあるのかなということを知りました。

また、舟で春の湿原を遡っていったこともあります。大変に花が咲き誇っていて実にきれいな美しい場所でありました。しかし、ついに流木が舟に引っかかってそれ以上進めなくて帰ってきたのですが、そういうのも今から思えば実に楽しい取材であったと思います。

このようなことをしているうちに、主人公の「雪森厚夫」にだんだん自分の気持ちが乗り移ってきました。そして、少女に対しても感情移入する、つまり恋愛をしてくる

という気持ちに自分自身になってくるのです。

さて、普通、新聞小説の挿絵というのは、その新聞小説の物語の人物を描く、つまり言ってみれば、小説の説明みたいな挿絵が多いのです。ところが、野田さんのお描きになった挿絵は、象徴的なあるシーンを動物だとか、マッチ棒だとかいろいろなものによって表現しているのです。それは、作品の説明にはならない。しかし、作品のある気分と関係がある独立した絵画なのです。そのような挿絵っていうのはおそらく日本で初めてじゃないかと思います。

時々びっくりするようなことを野田さんはおっしゃる。「今、鮭を描いているのだけれども、鮭の鱗はいくつ有るか知っていますか？」と。私は「全然知らないけれども」という。「僕は半分くらい描いたけれど、もう力尽きたので半分でいいですか？」というので、「もちろんそれは絵としてよければよろしんじゃないですか」といいました。後日、送ってきた絵を見ると鮭が半分描いてあって、「後は描けません」という但し書きが書いてありました。しかし、実に立派ないい絵ですね。

このように、地元の物語の背景にあるいろいろな事物を次々に野田さんは描いていく。それが私にとってはひとつの驚きであると同時に励みになりました。よし、こんなに立派な絵を描くのならば、小説ももっと立派に書かなくては行けないなと思いました。

野田さんが「湿原」の中で描いているのは、マッチ棒だとか注射器だとかコップだとか、あるいは100円玉だとか吸殻なんかを描くのです。吸殻はある会話でもって人々が煙もうもうとした中で話をしているところに吸殻を描く。酒瓶を描く、卵を描く、鉛筆を描く、電球を描く。この電球はなんだろうという、要するに話をしているうちにいつの間にか夜になって電灯がついたって私の説明があると、電灯・電球・裸電球、いかにも古風な裸電球を描くという具合です。そうすると、鳥にしても魚にしても植物にしても樹木にしても、すべて小説と関係はあるのですけれど、しかしそれは独立した絵画としても見られるものでありました。

最初に私が画集で見えて感心した「鳥の巣」が、ある日、連載中に挿絵として出てきた。野田さんが言うには、「この『鳥の巣』を見て加賀さんは僕を選んだ。これを描くのはいったい何日かかったか知ってるんですか？」



たしか4日か5日くらいかかったのかな。ところが1日に1つ描かなくてはならないのに4日かかった絵を見て決められたのは僕としては失敗だった」と野田さんはおっしゃる。なぜかっていうと、絵を描くのにも凄いの時間がかかる。ご承知のように野田さんの絵は細密画です。細密画で挿絵の部分を全部埋めるというのは大変な努力でしょうね。そうすると時間がないので、何を削るかという睡眠を削る。毎日毎日、必死で描くというような日々が続いた、ということの後で知りました。つまり628枚の絵を描くために大変な努力をされたのです。

鮭の鱗を半分まで描いた野田さんを見ると、鮭を描くときあれだけの努力をするのだから、鮭を出したときには、いかにも鮭らしい鮭の遡上の状態を書かなくちゃいけないぞ、とかいろんな意味で野田さんに対して闘争心が起きてきて、もちろん親愛の念も起きてきました。

そういうことがあって、私は本当に「湿原」という作品はだんだん書くにしたがって奥が深くなってまいりまして、いつ終わるのかなあと考えていました。不思議なもので小説というのは終わらせようとするとうつ終わるのですよ。終わるのに都合のいいような事件が次から次へと発想として出てきます。終わらせないとすれば、永遠に終わらないようなイメージが沸いてくる。これは長い間の訓練のおかげでそういうことができるようになるのですが、この「湿原」はちょうどいいところで終わってくれました。主人公の二人が死ぬという決意をして、溶けていく氷の上に乗って流されていくというシーンで終わるのです。

風連湖のそばにある風連川という川があります。この川は全部凍結しますが、春先になりますと全ての氷がある日、突然バリッと割れて一斉に海へと流れていくのです。それを見るために、野田さんと何日も何日も山に籠りました。今日割れるか明日割れるかと待っていると、「割れるぞー」って誰かが怒鳴った、確か野田さんだったと思うけれど、私かもしれない。そして丘の上に行きますと一面に覆っていた川が割れて、氷の塊になって海へと動いていく。あれを見たときに、なんて自然は美しいのだろうということを私は考えました。

この小説を書いているうちに北海道の自然の美しさに私達は目覚めてきたのですが、それは要するに人間の手が入っていないような自然がまだ残っているということです。今日も札幌からドライブしてくる途中で昭和新山などの山々が美しく夕日に輝いているのを見ておきますと、自然は不思議なことに醜いものは何もないとを感じるわけです。それ自体として自然は美しいわけです。どんな山もそれはそれとして美しい。ところが人間の造ったものは美しかったり醜かったり、出来不出来がある。神様が創ったものは森にしても雲にしても山にしてもすべて美しい。これは実に不思議でした。

たとえば、人間の体そのものも実に美しいですね。私は医者ですから死体解剖というのをやったことがあるのですが、人間の体というのは、血管ひとつ、神経ひとつ、筋肉ひとつでも実に美しい形をしているのです。それから、顕微鏡で覗いてみますと、肝臓だとか腎臓だとか、そういう臓器を拡大していきまると、非常に美しい、まるでお星さまのような、満天の星のような美しい形をしているのです。何で美しいのかということを生先生に聞きますと、「そんなことは考えたことなかった。そう言われてみれば美しいですね。なぜですかね」という答えが返ってきただけです。

つまり、人間の体も自然のひとつなのですよ。みんな洋服を着て何となくお洒落をしたりしていますけれども、その元になっている細胞を拡大して見ると実に美しいのですよ。小説を書いているうちにだんだんそう思うようになってまいりました。一つはこういうことです。小説というのは文章でものを表現する。何を表現するかっていうと、人間の生活を、あるいは性格を表現する。しかし、その元になっている私たちの生活それ自体は太古からそう変わったものではない。縄文時代から続いている何か美しいものを近代化したというだけのことであって、私たち自身の体は美しいです。

最近、秋葉原で起きた無差別殺人事件は、「自分に誰もかまってくれないから、みんな殺してしまえ」というものでした。しかし、そのように殺してしまえばいけない非常に大事な自然のひとつなのですよ、人間というのは。そのことが、この「湿原」という小説の主題にだんだんなってまいりました。

最後にさっきの風連川の氷がぱっと割れて、その割れた氷に二人が飛び乗って死んでいくというシーンを考えたときに、「あ、これで小説が終わったな」というふうに思いました。そして、野田さんに感謝して二人でじゃんじゃん飲みました。野田さんの、非常に真面目に朝から晩まで描く、あの凄まじいまでの芸術魂というか、そういうものに随分私は励まされたことを言って、私の話を終わりにします。



■講演後に野田弘志先生(左)との対談が行われました